



金知鉉、日本初個展である。ハンゲルと英語のパンフレットが手元にあっても、作家の情報に頼らず作品から得た印象から評するのが、現代美術にとって最も意義のあることだろう。現代美術はあらゆる権威を吹き飛ばすのだから、場所も時代も関係ない。1910年代のダダは決して古くない。今も生きている。現代美術である限り、「いま、ここ」の状態は永続する。

燃え盛る炎をポリウレタン、ブロンズ、写真に撮って立体化させ、人体を覆う。炎の表現をイメージのみで極める潔さが美しい。オーナーの吉岡によると、写真に写っている炎も実際に作っており、大きすぎて持ってこられなかったと本人が話したという。炎は彫刻を離れ、パフォーマンスとして生まれ変わる。今後は炎から身を守る防具が必要となる。この転換は金の想像力の成せる業だ。



この展覧会には、プロメテウスの火を主題とする立体作品、それから派生したパフォーマンスに使用する作品と写真作品、三人が話す内容が一つになる架空の装置のドローイング作品という、三タイプの作品が展示されている。注目すべきは技法、素材に拘らずに、自己のイメージをありとあらゆる角度からアプローチする点にある。日本の作家は分野に縛られすぎている。

そして防具が自立する。防火の筈が、人間の特質である表情を完璧に奪う防具は人間を非=人間化する。有機的な人間が無機的な物質に変容してしまっている不気味さが、この作品の特質となる。剥き出しの鉄筋コンクリートに幽閉されている姿に背筋が凍る。それでもこの人物は、背筋を伸ばして自身を持って緩やかに立ち尽くしている。それは総てを受け入れる姿勢でもある。



プロメテウスはゼウスに背いてまで人間に火を届けたが人間は自然破壊を繰り返す、ピンポイントミサイルを擲したピンポイントトーク等、金は現代社会に問題を提起する。

金がプロメテウスに触れている写真は、意味深だ。神を造った男は神ではない。かといって神が創った人間ではない。ここに創造の根底が隠されているのだ。その根底を問うことが我々の使命である。

